

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2014年12月22日

森林塾青水

事務局便り

茅風通信 44号



イタヤカエデの紅葉

- 9月～12月の活動報告(事務局) 1
- 一般参加歓迎プログラム④
「ミズナラ林整備・生き物調査」..... 2
- ◆開催報告(草野) ◆参加者感想(北原・伊賀)
- 一般参加歓迎プログラム⑤「茅刈り」..... 4
- ◆開催報告(草野)
- ◆参加者感想(岡本・間邊・江口・野中・荒)
- 第二回東京楽習会「みなかみ町藤原の生き物たち」..... 8
- ◆開催報告(稲)
- 一般参加歓迎プログラム⑥「山の口終い・茅出し」... 9
- ◆開催報告・感想(川端)
- 藤原現地報告..... 9
- ◆「上ノ原活動報告」NPOが炭焼き窯設置(北山)
- ◆利根川源流探検—最初の一滴を求めて(北山)
- 第10回全国草原サミット・シンポジウム in 阿蘇..... 11
- 台湾の飲水思源(川端) 12
- 上ノ原の四季—植物調査報告(西村) 13
- 野守のつぶやき(清水) 14

編集後記

(敬称略)

■ 9月～12月の活動報告

【 9月 】

●町役場が須田建設に発注の防火帯修繕工事が完了。

●13日 麗澤中学「麗鵬祭」にて、奥利根水源の森フィールドワークでの気づき・学びをテーマに発表がありました。(塾長以下数名が訪問、見学)

●27日、28日 第④回一般参加歓迎プログラム「ミズナラ林の整備と秋の草原・森林散策」を実施。管理されなくなったために森林化した40メートル四方を試験地として伐採、その後の植生の推移を調べる学術研究に協力するもの。会員・一般の参加者20名に地元の協力者3名が参加。作業終了後、県道の草刈奉仕を行いました。参加者の中から2名が新しく入会しました。

●諏訪神社の屋根葺き替えが無事終了、今まで寄附した茅に加え、3万円を寄附しました。

【 10月 】

●11日 第2回東京楽習会を実施。「みなかみ町藤原の生き物たち」と題して日本野鳥の会や市原トンボ池の会などのメンバーとして、造詣の深い多葉田会員がレクチャー、14名が聴きいっていました。

●25日、25日 第⑤回一般参加歓迎プログラム「錦秋の奥利根、草紅葉のススキ草原で茅刈り・

ボッチづくり」を実施。会員・一般合計40名に加え、のらえもんグループ20名、東洋大学佐野先生および学生12名、役場および地元勢10名の総勢82名が参加。天気、景色、茅の生育いずれも良好、2日目には恒例の茅刈検定が行われ、19名が受講、茅刈士補3 茅刈士心得12名が誕生しました。

●一部は延泊し、翌26日(月)にかけて、ミズナラ林追加伐採作業を実施しました。

●季刊「地域」(農文協)の茅特集で上ノ原が紹介。

【 11月 】

●15日、16日 第⑥回一般参加歓迎プログラム「初冬の枯れ野にたたずむ茅ボッチ運び出し」を実施。14名および地元勢が参加、3555束(うち森林塾青水が刈ったのは400束残りは地元勢)を搬出。(前年はそれぞれ3010束、260束)

●17日 オプションツアーとして5名が沼田、片品を訪問、蕎麦打ち、酒造会社など訪問しました。

●23日、24日全国草原サミット(阿蘇)が開催、前回のみなかみから無事バトンタッチされました。(塾長以下3名参加)

【 12月 】

●12月4日、群馬県立利根実業高等学校を草野、清水が訪問して、上ノ原フィールドの活用を提案。(以上)

■2014「一般参加歓迎プログラム」④ 開催報告 & 参加者レポート

9月の一般参加歓迎プログラムでは、学術調査のための伐採作業と、草原・森林のフィールド観察を行いました。初参加の北原さん、伊賀さんより感想をいただきました。

9月の活動「ミズナラ林伐採と草原・森林散策」 草野 洋

青水は、毎年、少しずつミズナラ林を抜き伐りして森林を若返りさせる作業を行っています。今年も、9月27日、28日、秋晴れの爽やかな秋晴れの中、会員・幹事の岐阜大学院生増井さんの研究である「草原放棄地における人為的管理再開後の植物の動態」、つまり、管理されなくなった元草原が森林状態になっているところを伐採した場合その後の植生の推移を見るための試験地を設定することを目的に、木馬道と管理道間のミズナラ林の伐採をしました。



7日（土）、参加者は、初参加者9人を含めた20人と地元のお手伝いが3人、総勢23名が上ノ原に集合し、秋風に揺れるススキを背に昼食をとったあと、管理道を伐採現場まで移動して作業目的、段取り、安全作業上の注意事項についての作業前のミーティングをしました。特に、今回は危険を伴う伐採作業であることから、やってはいけないことなど念入りな注意喚起をしました。



伐採箇所は、40m×40mの0.16haで、約300本を伐採することになります。伐採地は元ススキ草原に自然再生したミズナラ、アカイタヤ、ミズキ、ヤマモミジ、コシアブラ、オオヤマザクラなどが株立ちした二次林です。40年前までは20年ごとに伐採を繰り返していた薪炭林で、その後、利用されなくなり薪炭林としては大きくなりすぎて、直径30cm程度のものもあります。

伐採地に一度に全員が入ることは非常に危険であるため、ある程度の空間ができるまで経験者が伐採することにして、それまで他の参加者には草原・森林の散策をしていただくことにしました。



ミヤマシウドの
果実



サワアザミと
ゴマナ



伐採は、40数年山仕事をしてきた地元の中島さんを助っ人をお願いして、10人ほどでチェーンソー4台、と手鋸で行いました。藤原に移住した若手の北山さん、吉澤さんの二人にも手伝っていただき、途中から、マイチェーンソー持参の笹岡さんも加わりました。伐採作業は危険を伴う作業で慎重に行わなければなりません。重心が大きく偏っている木やつるがらみの木は特に危険ですのでベテラン中島さんにまかせます。広葉樹は材が堅く、チェーンソーの切れがあまり良くありません。伐採した木が隣接した立木に掛かる「架かり木」も発生して能率が上がりません。



それでも、散策組が伐採現場に合流したころには、適当な空間もでき、皆さんには枝葉の片づけ、伐採した木からサンプルを選び、太さや長さ、重量の計測もしていただきました。

伐採した木は、玉伐して、幹は薪に、枝は来春キノコ種ごまを打ち込む予定です。

16時ごろ、日も暮れかかったため、本日の作業は終わりにして情緒たっぷりの夕暮れのススキ草原を後に本日の宿である「たかね」に向かいました。



を復活させ、数種類のキノコも栽培していました。

この日は、皆さんには朝飯後の仕事として「県道の草刈り奉仕」をしていただきました。

このあと、昨日の続きの作業である伐採や枝葉の片づけ、計測を午前中いっぱい行いました。伐採は、全体



の半分程度しかできず10月に有志でもう一度作業を行うことにしました。

一行は昼食のおにぎりを食べ、「カンタン」の虫の合唱がにぎやかなススキ草原を後にしました。

今回の初参加者は9人でしたが、そのうち7人は朝日新聞の案内記事を見て応募された方々でした。縁を取り持っていたいただいた朝日新聞に感謝です。

また、会員であったものの今回フィールドデビューされた沼田で農機具を販売されている金井産業の社長さんと元教育者の北原さんに参加いただき、塾の活動を評価いただいたうえ今後も協力は惜しまないとありがたいお言葉をいただき、交流会も盛り上げていただきました。

そして、なにより初参加者の中から、さっそく会員に加入いただいた方が2人もいてうれしくなりました。

皆さん、ほんとうにお疲れ様でした。

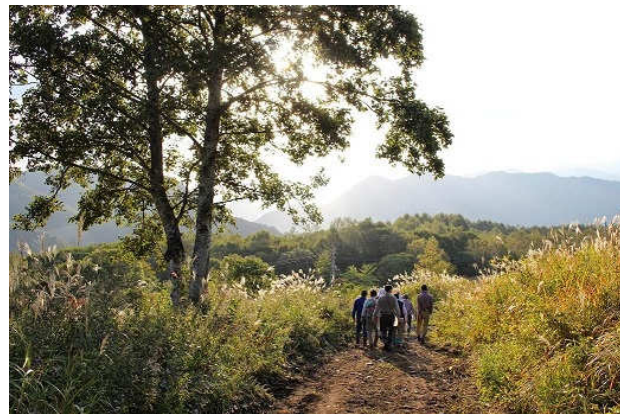
初めての体験

北原 一浩

長年の教職を退職（3月まで）して、第2の人生のスタートを切ったわけですが、今までに味わったことのないような経験をしたいと考えていたところ、昨年PTA会長でお世話になった金井さんに誘われて、9月27日（土）～28日（日）の生き物観察・伐採の学習から参加しました。天気がよくすがすがしい季節の中、山と一体になっているススキの草原を見渡しながらの体験でした。

まず、藤原の奥にこんな場所があったことに驚きを感じました。今までにスキーやゴルフでは、何度も訪れていたのですが・・・

次に、一日の体験を通して、参加をしている人たちの草木・蝶を始めとした生き物などや森林につい



この日の宿は、温泉民宿「たかね」、疲れた身体を温泉で癒し、伐採助っ人でもある宿のご主人中島さんのおいしい料理を堪能したあと、交流会でも中島さんからめったに聞けない3日間かけて利根川の最初の一滴が滴る源流を訪ねた「利根川源流遡行」山紀行を写真や動画を使って説明いただきました。（本誌11頁「藤原現地報告」参照）

この源流遡行、相当の危険もあったようです。この日は、長野岐阜県境の御嶽山の突然の噴火で多数の犠牲者が出た痛ましい災害が起こりました。自然の脅威は計り知れないものがあります。

次の日の早朝、宿の裏山を中島さんに案内していただきました。そこはブナの美林でした。こんな近くに美しいブナ林があるなんて・・・。これも、他の木を炭焼き用に伐採した結果ブナが残ったもので人の手が加えられた美林です。ここでは、中島さんが白炭窯



初日は、北山塾頭のMCで、はじまり、塾長、地元区長さんの歓迎のあいさつの後、「飲」「水」「思」「源」に班分けされた参加者は、地元古老の林親男さん、林三郎さん、阿部惣一郎さん、町田工業の神保さん、富沢さんを師匠に、それぞれの持ち場で鎌の研ぎ方から刈り方、伝統的な束の結わえ方、ボッチの立て方の講習を受けた後、茅刈りを開始。しばらくするとススキ草原のあちこちからザック、ザックと鎌音が聞こえてきました。



草の草原のススキは眺めているだけでも心を打つ風景としてよいものですが、これを刈って、抱えて、縛って、抱きついて、立たせてボッチを作っていきます。そしてその硬さ、強さ、しなやかさ、重さ、においを体感します。こうして作った茅ボッチを世に出せば神社や重要な伝統的建物の屋根葺として役に立つのです。この日は、初霜もあったようですが刈り始めると汗をかくほどになる絶好の茅刈り日和となりました。

本日のお宿は料理に定評がある「とんち」。飲水思源の班分けは、昼・夜のお互いのコミュニケーションを深めようと部屋割りと同じにしたためか、初参加の方から始まった交流会も大盛況でした。

2日目、希望者は茅刈り検定をうけ、それ以外の方は昨日に続き茅刈りです。

検定のポイントなどを説明して希望者を募ると昨夜の勧誘が功を奏して19名の方が申し出ました。



ザックと鎌音が聞こえてきました。

草原のススキは眺めているだけでも心を打つ風景としてよいものですが、これを刈って、抱えて、縛って、抱きついて、立たせてボッチを作っていきます。

受検者はそれぞれの班の師匠から検定されます。アシスタントが鎌の音、腰つき、縛り方、出来上がったボッチの姿などを師匠に尋ねて採点していきます。この検定は、安全性、技術性、芸術性が求められるもので世界に唯一と自負しています。(採点基準は次頁参照)



初日には気楽に取り組んでいたものの検定となると皆さん真剣そのもの、ある受験者は、「いや～ ついついはまって、時間や太さが気になって、においなど味わう暇がありませんでした。もっと楽しまないとイケませんね、競争社会で生きている性ですかね。自分の普段の生活を見直すきっかけにもなりますね」との感想をもらっていましたがこれも茅刈りの効用ですね。



悪戦苦闘した1時間、結果は、17ポイント中、最高点が15ポイント、茅刈士補に三好さん、西村さん、南野さんの3名、茅刈士心得が12名となり、それぞれ称号を与えられました。これで2010年の3名、2011年の2名と合わせて8名の茅刈士補が誕生しました。

やはり、難しいのは1時間に2ボッチを造ること、伝統的な草縛り、ごみ(雑草)の混ざらない美しい姿の茅ボッチを造ること、ボッチの立て方が難しかったよう

です。ある師匠がおっしゃったコツの一つ、「束を結ぶとき、茅束の腰にあたる

諏訪神社の屋根葺も上ノ原の茅で葺き替えられました



とことりより上でし **茅刈検定判定基準表**

級区分	判定項目	判定の着眼点	判定基準	判定 (○、×)	級の細分
初級	基礎知識	ススキ、草原に関する知識は十分か	①草原の現状に関する知識(テキストを読んでいる) ②ススキに関する知識(テキストを読んでいる) ③ススキ草原の管理に関する知識(テキストを読んでいる)		○の数 級と級の細分
	安全作業	安全作業が出来る技術を備えているか	①作業に適切な服装である ②安全な鎌の砥ぎ方が出来る ③安全な鎌の使い方(刃掛け、持ち方、周囲確認)ができる		17個 上級 上 16個 中 15個 下 茅刈士 14個 中級 上 13個 中 12個 中 11個 下 茅刈士心得 10個 下
	基礎技術	茅刈の基礎的な技術を習得しているか	①1時間に5束(1ポッチ)を刈ることが出来る ②束の大きさ(20cm以上)で結束がゆるくない ③束のゴミの除き方が上手に出来る		9個 初級 上 8個 中 7個 中 6個 下 5個 下
中級	安全作業	作業に安定感があるか	①上手な鎌の使い方ができる(音がよい) ②身体に負担のない刈り方が出来る(安定感がある)		△は 獲得ポイントに カウントしない。
	技術向上	作業の能率、ポッチの出来不出来に 気を使うことができるか	①1時間に2ポッチを刈ることが出来る ②束とポッチをきちんと束ねることが出来る ③細くて真っ直ぐな穂着きの茅で 高さ1.5m以上のポッチが作れる		
上級	至高技術	より高度な技術で能率良くできるか	①1時間に4ポッチ程度を刈ることが出来る ② 美しい姿・形のポッチを作ることが出来る ③束とポッチを茅で束ねる伝統手法が出来る		

1. 判定基準に達しているものに○をつける
2. 基準に達していなければ×をつける
3. 1と2の間は△とするがポイントにはカウントしない

ばるとうまく立てることができる」とのことです。
尚、参加者には成績認定書を後日送付しました。
こうして、2日間にわたって皆さんが上ノ原に立てた茅ポッチは80ポッチ(400束)となりました。これらは11月の活動日に道路まで引き出し、ストックしておいて屋根萱に使います。どこかで第2の人生を送る茅ポッチにお目にかかれるかもしれません。
燃えるような素晴らしい紅葉の中で行われた茅刈・検定は盛況裏に終了しました。皆さんご苦労様でした。
この2日間の茅刈風景に感化されて、「上ノ原茅ポッチ小唄」をつくり、青水のブログに掲載しました。どなたか曲をつけていただけませんか。

錦秋の奥利根に魅かれて

岡本 仁太

10月25・26日、「錦秋の奥利根」の響きに魅かれ、森林塾青水「茅刈り・ポッチづくり」イベントに参加した。両日も抜けるような晴天となり、空の青さが紅葉の彩をいっそう際立たせ、「グリーン・パワー」(森林文化協会月刊誌)表紙の中を散策しているような感覚にと。



一日目、上ノ原「入会の森」の散策の後、4グループに分かれ、各々森林塾青水リーダーと

地元古老の方々に講習&実地指導していただいた。我が「源」班は富沢智恵さんからポッチづくりの基礎を教わった。

そもそも、「古老」とは良い響きだ。人生の大先輩という意味合いだけでなく、マイスターに対する尊敬の念が加わっている。「淡々と刈っていると、そのうちコツがつかめてきます」の言葉通り、腰に気遣いながらザック、ザックとススキを刈っていると束がみるみる出来上がっていく。2時間も作業を続ければ汗びっしょりとなり、ポッチの誕生となる。このひたすら感が新鮮だ(遠くから眺めると法師に見えるところからポッチというのだろうか)。

二日目は希望者を対象に、茅刈り検定が実施された。折角の機会なのでチャレンジしたが、これがなかなか難しい。級は初・中・上の3つ。各級の判定基準も厳格に定められており、合格ラインも明確だ。結果、10点。中級の下。「茅刈士心得」とのことで、こっそり小躍りした。

今回刈ったポッチは神社仏閣などの文化財補修に活用されるとのこと。参加した大学生の笑顔が印象に残っている。

豊草原瑞穂国

間邊 英

10月5日に十日町の農家で稲刈りのお手伝いをした帰り道、上原さんから「豊草原の草原に行ってみない」とお誘いをうけ、あっさりと参加することを決め、今思えば同じ月に稲刈りと茅刈りを満喫した幸せな10月であったと一人感慨に耽りながらこの感想を書いております。

初日、水上 IC を降りたバスは紅葉に彩られた山に囲まれた道を一路藤原へ進み、お昼にススキ草原

へ到着。バスを降りると爽やかな空気を思い切り吸い込みました。空気がおいしい。雲一つ無く、目にしみるような青さ、こんな良い天気は滅多にないとのことでした。かぜも無風。陽向にいと小汗をかくくらい、10月下旬で標高1000mとは思えない穏やかな陽気でした。すぐに昼食を済ませて30分ほど付近を清水さんの案内で散策しました。途中、十郎太の泉でのどを潤すとまるやかな口当たりとさわやかな香りを感じました。

茅刈りは飲水思源の言葉ごとに班編成があり、私は「飲」グループとなりました。師匠は林親男さん。失礼ながらお年をお聞きするとなんと父と同じ年でした。我が父とは違いやさしく丁寧な指導を受け、習うより慣れろで山の紅葉と師匠に見守られながら初日は1ボッチをつくり終了。

茅を刈る時の左手の手の向きが稲刈りとは逆だということが驚きましたが稲より背の高い茅を刈るときはそのほうが合理的なのだと分かりました。※稲を刈るときは親指を天へ向け、茅を刈るときは親指は地面へ向けるとのこと。

宿に戻るとすぐに夕食でした。夕食はどれも美味しく（とくに氷頭〔ひず〕が！）お腹一杯になり、そのまま大広間での2次会へ。みなさまがご持参されたお酒をいただくとさらにご機嫌になりました。

2日目、6時に宿泊したロッジとんちの周りを10名ほどで朝の散策へ出発。清水さんから村の話歩きながらお聞きしていると、遠くの山に朝日がさし、山頂から山の色が変化していく様子を眺められ、あっという間に朝食の時間。

朝食を済ませすぐに茅場へ出発。今日は茅刈り検定の日。前日より心持ち緊張しつつも出来るだけ良い茅を選ぶように心がけ1時間で目標の2ボッチ完成。茅刈土の条件、1時間4ボッチにはほど遠い結果でしたがなんとか茅刈土心得は合格できました。

ここ数年は田んぼの援農をして瑞穂の国は実感しておりましたが念願かなって豊葦原の国の葦原にもお役に立つ形でかかわることができて本当にありがたいことだと思いました。

最後になりましたが、森林塾青水のスタッフのみなさまには大変お世話になりました。また機会があれば参加させていただければと思います。夕食後に見た星空もとても素晴らしく、紅く明るい大きな流れ星を見ることが出来たのもうれしい出来事でした。希望の光に見えました。

人間を含めた自然環境との調和の大切さ 江口 俊之

私は現在、横浜の相模原で農薬も化学肥料も使わない、生き物の豊かな地力のある土壌でコメや野菜を栽培する農業を学んでいます。毎週週末には援農に出かけ、気持ちいい汗を流しながら、これからの暮らしのあり方について深く考え、未来につながる心豊かな生活にシフトすることを目指しています。

今回、そこで出会った上原さんにお誘いを受け、そこで何かが見つかるかもしれないとの期待からツアーに参加をさせていただきました。はじめは正直何も知らない私は、環境を守る立場で活動する上原さんが、なぜ自然豊かなススキ野原を刈り野焼きをする活動に参加しているのか、自然環境を壊し豊かな生き物の命を奪う活動に参加しているのか、ちょっと不思議に思っていました。が、参加して始めてその意味を理解することができました。

私が今回このツアーで学んだ事は、人間を含めた自然環境との調和の大切さです。その中での人間の暮らし方のあるべき姿です。昔の先人達の知恵と長い年月をかけて築いて来た理想的な深みのある暮らし方、持続可能な暮らし方の大切さです。

もう一つ感じたことは、今の暮らしを更に豊かなものにするためには、森林塾青水に集う人間力豊かな人達が交流し繋がっていき、同じベクトルを共有し活動を広げていけば、きっと明日に繋がる未来の暮らし方が現実のものになるかもしれないと感じたことです。

活動を継続する難しさを乗り越えて頑張る森林塾青水の皆様には、ほんとうに頭が下がります。

明日に繋がる未来の活動の一つとして、また機会がありましたら是非参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

ボッチ作り

野中 陽子

晴れ渡る素晴らしい天候に恵まれ、藤原に近づくと、紅葉が山一面に広がってきます。バスは上ノ原に到着しました。一面すすきの原っぱです。

山から流れてくる湧き水を頂き、最高の景色の中でお弁当を食べ、皆で原っぱを登り、紅葉した木々を眺めました。道すがら聞こえてくる虫の声。カンタン（邯鄲）。コオロギの一種で半透明をしているそう。さらに登ると、溜まり池や見事に赤く紅葉したモミジ。熊が看板を噛り倒した跡も。めずらしい蝶が集まる場所といます。湧き水を求めてやってくるのでしょうか。色鮮やかな紅葉、虫の声、動植物の気配。眠っていた感覚が開かれていくようです。

開会式を終えて、いよいよボッチ作り！私は「飲」のグループ。先ず師匠の林親男さんがお手本を見せてくださり、それを真似してボッチ作りを始めました。

鎌の使い方も思うように行かず、一抱えのススキを束ねるのは大変でした。黙々と作業を続け少しずつ要領を得たころ、休憩の合図。湧き水で点てたお抹茶とお菓子は格別美味しく、幸せなひと時。

今日は他の人が作った束を合わせてひとつのボッチを作るのがやっと。作業が終わる頃、夕陽にあたったボッチたちの姿は本当に美しく、いつか、何処かで見たような懐かしい心温まる光景でした。へとへとでしたが、晴々とした充足感を感じました。

夜はとんちで美味しい夕食を頂いた後、大広間で

■第2回東京楽習会「みなかみ町藤原の生き物たち」開催報告 稲 貴夫

参加者の自己紹介に耳を傾けました。参加の動機は様々ですが、皆の話に共感し、自分自身を振り返りました。何故参加したのでしょうか？一番にボッチ作りが楽しそうだったから。そして文化や伝統を大切にすることに携わりたかったから。参加してよかった～しみじみ思いました。

2日目は日の出と共に起き、散策に参加しました。キーンと冷たい、清々しい空気。至る所で木々が色づき、落ち葉が秋の深まりを感じさせます。宿では、きのこ一杯の美味しいお味噌汁とごはんが待っていました。食欲モリモリ、しっかり働けそうです。

ボッチ検定では、すすきを左手で重ね持ちし効率を上げる技を身に付け、あれよあれよと、ボッチになる束が5束出来ました。しかしすすきを束ねるのに苦戦。やっと1ボッチの完成です！2ボッチにもう一息のところまで終了の合図。

この後、林さんに上ノ原を案内して頂きました。すすきには色々な使い道があり、茅葺き屋根、田畑の肥料、この辺りでは蚕を育てるのに必要であったそうです。昔から薪に使われていた大きな木や、炭焼き窯跡の大きな穴。この地域の伝統が少しずつ形を変え、失われつつあることを痛感しました。

冬になれば雪深く、生活するご苦労は想像以上のものでしょう。林さんの後ろ姿に、脈々と伝統と暮らしを守り続けてきた力強さと生きる知恵を感じ、尊敬の念を抱かずにはいられませんでした。

閉会式後、焼きおにぎりときこの汁を頂きました。この2日間、地元の美味しいもの、個性豊かな多くの方々と出会いました。そして、様々な文化に触れ、貴重な体験をし、楽しく過ごせたことに心より感謝します。ありがとうございました。

御世話になりました

荒 儀右衛門

先日は御世話になりました。

二十四節気のひとつ「霜降り」の気候にぴったり、青空の下、草木の葉は黄変し美しい風景を見ることができ感激でした。茅刈り体験も面白く出来ました。最後まで残ってやる事が出来ず残念でした。

塾の活動は自然を守り伝承して行くうえでは大切な活動であると改めて認識致しました。山林は上流～下流まで大切に管理をしなければなりません、何故ならば自然界に身を置く私達の命を守る必要があるからではないでしょうか。合言葉「飲水思源」万歳。食後のグループ討議においても



多様な意見を皆様が寛容な態度で聞く姿に安心感を得ました。

又お会い出来ることを楽しみにしています。

本年度第2回目の東京楽習会は、多葉田五男会員を講師に10月11日の土曜日、渋谷区神宮前の地球環境パートナーシッププラザ・セミナースペースで開催し、会員15名が参加しました。



多葉田講師は日本野鳥の会や市原トンボ池の会などのメンバーとして、長年にわたり野鳥や昆虫、それらを支える植物たちの調査を続けてこられました。藤原には青水のプログラムの他にも単独で足を運び、鳥や虫、草原の植物を撮影し、記録してきました。その成果の一部は青水のウェブサイトでも紹介されています。今回の楽習会では、野鳥をはじめ、蝶類やトンボを中心に、藤原、そして上ノ原の生き物について、映像や野鳥の鳴き声を通して紹介いただきました。以下はその概略です。

○野鳥編—みなかみ町藤原の生き物リストの中で、多葉田さんが整理したリストは89種、写真は45点準備いただきました。実際に鳴き声を流していただき、ホトトギス「特許許可局」、アカショウビン「キョロキョロン」、イカル「お菊二十四(オキクニジュージ)」などの鳴き声の聞きなしと比べながら解説いただきました。

○蝶編—藤原の蝶のリストは80種、その中から45点の写真を紹介いただきました。藤原には群馬県下における蝶の63パーセントが生息しているとのこと。まさに藤原そして上ノ原は蝶の宝庫です。

○トンボ編—藤原のトンボは19種、そして22点の写真を準備いただきました。藤原では最近、トンボを見かける機会が少なくなったということですが、アキアカネなど赤トンボの生態は、まだまだ謎に包まれているのだそうです。多葉田さんより、日本自然保護協会が行っている「自然しらべ2014 赤とんぼさがし！」を紹介いただきました。詳細は下記のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.nacsj.or.jp/project/ss2014/>

○その他

九月の上ノ原のプログラムで捕獲し、友人手製の虫籠で飼育しているカンタンやスズムシを持参いただきました。カンタンは「邯鄲」と書くそ



うです。中国の地名から来ているとのこと。講義の終了時間に合わせて、スズムシが美しい音色を聞かせてくれました。写真は、籠の天井にへばりついた多葉田講師持参のカンタンです。

質疑応答の時間には会員各位より様々な質問や感想が寄せられました。清水顧問からは、上ノ原、そして藤原地区に生息、生育する野鳥や昆虫、植物の全体像や相互関係の理解がさらに深まるようなフィールドでの活動についての積極的な提案がありました。最後に草野塾長より挨拶と今後の活動予定についての報告があり、第二回楽習会は終了しました。

多葉田会員の調査報告は、森林塾青水のウェブサイト内に「フィールドの生き物たち」としてまとめられています。これからフィールドに出かける際には、是非事前楽習も兼ねてご覧ください。

■2014「一般参加歓迎プログラム」⑥ 開催報告 & 参加者レポート

11月15・16日の定例活動は、10月に刈り取った「茅ボッチ」の運び出し作業を15名が参加して実施しました。初日は雪が降る中での作業となり、参加者にとって忘れ難い経験となったようです。

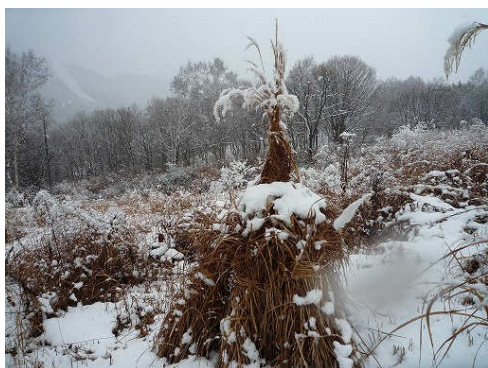
二日目はすべての作業を終えた後、一年間の感謝の気持ちを込めて「山の口終い」を行い、今年フィールドでの活動を終了しました。

茅ボッチ 運び出して 雪ヒラリ

川端英雄

街中とはえらい違い。粉雪がふってきた。3週間前の茅刈りのときには抜けるような青空、あったかい上ノ原だったのに。車が停まった原っぱの入り口で、萬枝さんが焚火を焚きつけている姿が見えた。まだ、赤い炎がみえず白い煙が少し。雪のせいでいつも柔らかな稜線をみせている。須原尾根もはっきりせず、もちろん上州武尊山の頂も。

焚火に近寄る。太い枝の下から炎がチロチロしている。濡れた枝、さむい中での火おこしは時間がかかるようだ。でも、ふだん見る焚火とは感じがちがう。薪は井桁に組まれるのがふつうなのに、萬枝さんは薪を平行においている。太さ15～20cm、長さ1m程度の細い丸太を上積み、もえやすい小枝などが下にあってそこから炎が出ているようだ。どうやら、風は一方方向に流れやすいとの、生活の知恵とみた。あり合



わせのうちわ様のもので煽ぐと、すぐに大きな炎が丸太のあいだから吹き出してきた。

萬枝さんから、ボッチを運び出すための縄かけ方の指導を受ける。萬枝さんはムダ口を叩かない。腰縄にぶら下げた縄の1本をとり、その縄を坂の方向と垂直におく。「おいた縄が、ボッチの下端から50cmくらいの高さになるよう、ボッチを横たえるんだ」と。左膝でボッチを押さえ、左手で手前の縄を持ち右手でボッチの向かい側の縄を持つ。捻じる。たしか、2回程程度だったと思う。よじった縄のそれぞれを固くまいた縄の下を通して、結ぶ。「結び方は一重で充分」と。雪がふり続けている。

草原のあちこちに散らばって立っているボッチに縄かけをし、眼見当で1ボッチ30kgくらいありそうな茅束を2ボッチ、あるいは1ボッチを肩にして、運搬車がとおるところまで引きずりおろす。起伏があるので下り坂一



方ではないところもある。ボッチを下してまた、ハアハア息をつきながら散在するボッチを求めて坂を上る。傍目には、ソルジェニーツイン（ロシアの作家）の「イワン・デニーソヴィッチの1日」に出てくる囚人のように見えるだろう。仲間内で「収容所列島だな」と笑う。

ボランティアの作った茅ボッチと、地元古老たちの作った茅ボッチは、重さも結束の固さも、ボッチ内の空間の大きさもまるで違う。それは、ボッチを肩に載せて実感する。工場生産の商品群の中で生活している我が身にとって、身体を使った仕事や手で物づくりをするのは、まさに千載一隅の機会（千載一隅のような4字熟語も若い世代には縁遠い時代かも）。いま、あらためて肉体労働のありがたさを知る。あけっぴろげな上ノ原の空間で、細胞活性化をしみじみと感じる。立って食べている弁当の中に、雪片がヒラリと舞いこむ。まだ、雪はふり積もる。

■藤原現地報告

「上ノ原」活動報告—NPOが炭焼き窯を設置 北山 郁人

NPO 法人奥利根水源地域ネットワークでは、環境省の助成金を頂き、上の原に炭焼き窯を作っています。阿部惣一郎さんの指導のもと、かつて藤原でよく焼かれていたすべて石でできている白炭の窯を作っています。11月から作業を始め、ほぼ1か月か

けて石を一つずつ積み上げ、窯の部分は完成させることができました。天井部分も石で作るのですが、エスキモーのイグルーのように石を組み合わせ作り上げる技術は、もう惣一郎さんしかできません。



窯づくりと並行して、たかねの仁三郎さんの炭焼きも手伝いながら、焼き方を指導していただきました。白炭は、真っ赤に焼けているところを窯から引き出し、高温で焼きしめることにより、重くて火持ちのよい炭ができます。実際、仁三郎さんが焼いた炭とホームセンターで売っているインドネシア産のマングローブの炭を焼比べてみました。仁三郎さんの炭は、煙にもおいても全くなく、高温で均一によく燃えるのに対し、マングローブの炭は、煙と鼻につくにおいが立ち込め、室内では到底使い物にはなりません。今後は、藤原の炭焼きにかかわる技術や歴史などを聞き取り調査し、冊子にまとめる予定です。



の炭は、煙にもおいても全くなく、高温で均一によく燃えるのに対し、マングローブの炭は、煙と鼻につくにおいが立ち込め、室内では到底使い物にはなりません。今後は、藤原の炭焼きにかかわる技術や歴史などを聞き取り調査し、冊子にまとめる予定です。

は、藤原の炭焼きにかかわる技術や歴史などを聞き取り調査し、冊子にまとめる予定です。

利根川源流探検—最初の一滴を求めて

北山 郁人

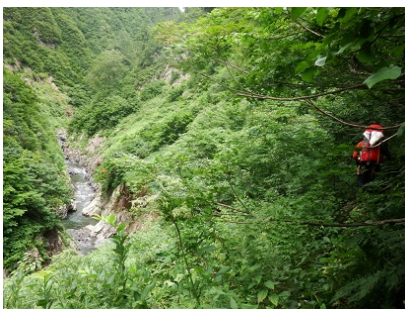
利根川の最初の一滴を求めて源流を探検してきました。

9月8日から矢木沢ダムを船で渡り、利根川本流を3日間遡り、新潟県六日町にある三国(さぐり)ダムまで、歩きとおした。メンバーは、中島仁三郎さん、金子さん(アウトドアガイド)、松田さん(アウトドアガイド)と北山の4人で行ってきた。



今年は、矢木沢ダムの水量が多かったので、水長沢出会い付近まで船で行くことができた。

歩き始めの流れは、まだまだ水量が多く冷たい。時



には腰まで水に浸かりながらひたすら源流を目指す。しかし、泳いでも通過できないような難所は高巻きをして迂回しなければならない。上の写真はシッケイガマワシ(子どものカモシカは通れないのでよける所という意味)を高巻いているところ。



こんなところにも昔の猟師の書付けがブナに残っていた。また古い鉱山跡があったり、歴史を感じさせるものが残っている。



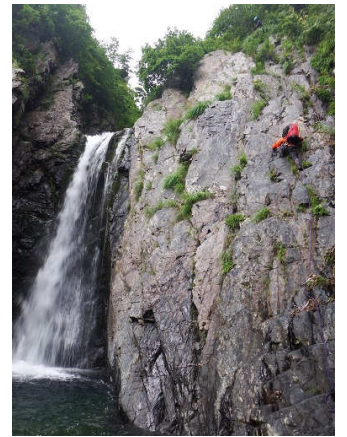
今回の一番の心配は、雪渓がどれだけ残っているかでした。雪といっても、完全に氷の塊で、ちょっとした崩壊に巻き込まれても即死です。下を通過するときは、息をひそめて一人ずつくぐった。



源流域には、大きなイワナが残っている。ありがたく晩

飯として頂いた。

右の写真は、利根大滝20mを越えていくところ。後半は20m前後の滝がいくつか現れるので、気が抜けない。それにしても仁三郎さんは健脚である。奇しくも源流にたどり着いた日は、67回目の誕生日であった。



3日間歩き続け、やっと利根川の最初の一滴にたどり着くことができた。僅かに残った雪渓の数十メートル先は、新潟県であった。





利根川の始まり

(「そうだむさあ」第8号より転載)

「第10回全国草原サミット・シンポジウム in 阿蘇」報告 浅川 潔



11月22日～24日にかけて阿蘇で第10回草原サミット&シンポジウムが開催されました。

1日目はエクスカージョンで、約60名が草千里の見学、展望台前の杉林を伐採し草原にもどしたおかげで眺望が良くなり、雄大な阿蘇の自然の中でも、裏千里の草原がある風景は絶景でした。その後、急傾斜の草原で輪地切りの作業現場を見学、15年以上活動している経験豊かなボランティアが作業をしていました。阿蘇の輪地切の長さは350キロ、なんで続けているのかと言う質問には達成感があるからと。夜峰山から見る景色もすばらしかったです。

最後に外輪山に移動してススキで作った小屋、草泊まりを紹介していただきました。阿蘇は外輪山の上に草原が広がっているので、草刈りの時期に下の集落から10キロ通うのは大変で、一家でこの草泊まりに1週間くらい寝泊まりしたそうです。竹で骨組みを作り、茅を編んでできている草泊りは、ちゃんとつくれば2年くらい持つそうで、最近では子供たちと草泊り体験などをおこなっています。



2日目はシンポジウムで、基調講演・事例報告・分科会などがありました。最初に宮崎大学の西脇亜也先生による基調講演で「**草原が持つ公益的機能と経済的価値について**」話を聞きました。大変わかりやすく話をしていただき、茅の利用については、季刊地域の記事も使って紹介していました。

事例報告では、阿蘇中央高校の学生が「草原プロジェクト阿蘇の草原文化を未来へ」について、農業環境技術研究所の楠本氏が「茶草場草地における茶生産と生物多様性」、秋吉台草原ふれあいプロジェクト松井氏が「秋吉台の草原を次世代へー観光と保全の両立を目指してー」の事例を紹介してくれました。茶畑でススキをマルチに使うと、データ解析されていないがなぜかおいしいお茶ができるそうです。



午後は5つの分科会に分かれてディスカッションでした。私は、第2分科会「**草原を地域の宝として輝かせる**」に参加し、阿蘇で野草に牛糞を混ぜて堆肥化し、その堆肥を使ってブランド化した野菜栽培の紹介、野草を刈って飼料にする取組みや、神戸の茅葺き職人が茅葺きの家を市民に親しめるように音楽会などのイベントと絡めた事例や、住宅地の横の茅場などの取組みを紹介してくれました。

続いての全体討論会では、各分科会からの報告、第1分科会は「**草原の公益的機能と経済的価値について**」、阿蘇の草原が全国の二酸化炭素の16%を根や土壌に固定できるとか、草原の経済価値として熊本県民より阿蘇住民の方が高く、全国の草原でも経済価値評価し、農畜産業に還元していきたい。



第3分科会は、「幅広い市民運動としての草原保全活動と地元との連携」ボランティアがどうして継続的に活動しているのかということ、団体の熱意、参加する事による達成感、充実感、人と自然との交流など、ボランティアも高齢化により後継者づくりが必要みたいです。阿蘇は千年委員会という募金活動の支援団体があり、第一次は熊本、第二次は福岡の経済界にお願いしています。全校で草原100を選んでその草原再生を支える応援団が必要です。

第4分科会は、「火入れの安全性確保について」幹事の増井さんが全国の火入れの状況について説明し、火入れ自治体アンケートを紹介、事故はないが危険性を感じたが30%、安全体制が必要50%、阿蘇の事故後、半年ボランティアの活動を休止し、安全対策会議を10回くらい行ない、ボランティア安全宣言を掲げた。・危険性について全員が認識する・危険性が高いので研修会、防火帯、装備品の準備・地元とボランティアが協力して、先人の貴重な財産を守る。損害賠償保険や難燃性の作業服を紹介されたようです。

第5分科会は「第2回全国子ども草原サミット」ふるさとの草原は宝の山、ぼくたち草原まもるモンを開催し、阿蘇が2校、大分、山口、広島から小学生がそれぞれの活動を報告し、阿蘇宣言を発表しました。北広島の意思を引き継ぎ、ふるさとに草原を持つ子供達が・美しい景色や大切な着物をまもるたね自分たちのできること・草原の良さを多くの人たちに伝える・地域に草原を持つことにより誇りを持つこれからの担い手である子どもたちから、大変積極的な意見も飛び出し、会場の参加者からは大きな拍手がわき上がりました。

そして最後に全国草原シンポジウム阿蘇宣言が読み上げられました。阿蘇宣言には、「草原の有する公益的機能の経済的価値」を明らかにし、「残したい日本の草原100」の選定に着手、草原を「国民の共有財産」として位置づけ、等盛り込まれていました。

夜の交流会では、各地からの参加者と懇親が計られ、草原の話題を中心に多いに盛り上がりました。

最終日は草原サミットの開催です。14の市町村の首長が一堂に会し、最初に前回草原サミットの概要をみなかみ町長が報告し、次に高橋さんが前日のシ



ンポジウムの報告と問題提起、その後各自治体の取り組みや課題などを紹介したあと議論をされました。

第10回全国草原サミット「阿蘇宣言」では、草原の維持管理を安全強化に行い草原を再生に取り組む、次世代へ繋ぐため草原学習を通じた教育振興、草原の維持保全のために地域資源を活かした地域活性化に取り組む、残したい日本の風景「草原100選」の制定、自治体との連携強化のため全国組織の推進と充実化、の5つの提言が宣言されました。

テーマである「守りつなごう草原の恵み！おとなも子どもも！」が実現し、多様な恵みある草原の価値が高まり、次世代へ引き継がれるよう願います。

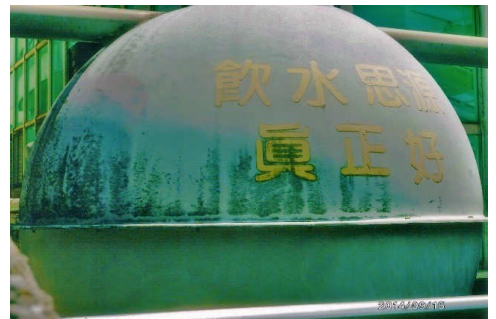
今回は、阿蘇くじゅう国立公園指定80周年記念も兼ねているからか、環境省の職員が10名くらい参加していました。やはり阿蘇は日本の阿蘇ですね。

■「台湾の飲水思源」

川端英雄

9月の半ばに、日本野鳥の会主催の「グリーン・ホリデー in 台湾」に、青水幹事の松澤さん、会員の多葉田さんと一緒に参加しました。

プログラムにしたがって、「ツバメの巣の保護」をテーマにした発表会を聞きに現地深美(シェンメイ)小学校を訪れました。校舎入口脇に直径4~5mの大きな2基の雨水タンクがあり、なんと、その横っ腹に「飲水思源 真正好」「雨水回収 最環保」と大書してあるではありませんか。森林塾青水が合い言葉にしてきた「飲水思源」が、です。(右写真・「真正好」の上に



「飲水思源」の黄色の文字が見える)

そればかりではありませんでした。正面玄関入ると、大きな掲示板に「飲水思源」の意味・意義(漢字ばかりで正確には理解できませんでしたが)が書かれ、その出典である小学生の国語教科書が拡大コピーして掲示されていました。

同行の台湾人通訳の、台湾では小学2~3年生頃から「飲水思源」を国語の教科書を使い全国で教えている、との話と符合するものです。同校の陳校長に、着用してきた「飲水思源」が背中にかかれた、森林塾青水10周年記念の黒シャツをお見せすると、我が意を得たとばかりに大いに喜ばれました。会話ができれば、もっと交歓できたのに残念でした。

別の場面でも、現地のNPOリーダーや議員などにこの黒シャツを見せると即反応があり、台湾では「飲水思源」のことばとともに、その意義が理解されていることがうかがえました。

上ノ原の季節(五月～九月)―植物調査報告

西村 大志

今年一年を通じて、上ノ原の植物調査を行ってきました。入会地の草原と森林で確認できた植物の種類と、生えている環境、花や実の状態を、時間の許す範囲で記録するという簡単な調査です。まだまだ上ノ原の植物を網羅できてはいませんが、今年度で156種の植物が確認でき、過去の記録にはなかったランの仲間も見つけることができました。ここではすべてをご報告することはできませんが、季節ごとの上ノ原の植物を少しだけご紹介したいと思います。

(調査日：5月31日、7月13日、7月26日、8月24日、9月21日、9月27日)



5月の草原。写真の右側が野焼きをしていないところ、左側が野焼きをしたところです。見た目が全然違いますね。野焼き跡のほうが、植物の緑によくおおわれています。地面に積もったススキなどの枯れ茎が燃えてしまったので、新しい植物が成長しやすくなったのでしょう。



同じく5月、森の中にはフデリンドウの可憐な花がびよこびよこと顔を出しています。ああ、こんなにきれいな花なのに、5月は青水の活動がないなんて、もったいない！



7月の上ノ原は蝶の王国のように感じました。シジミチョウやヒョウモンチョウの仲間が、アザミ類、カセンソウ、ニガナなど、様々な花に訪れます。とりわけ人気なのは、写真のナワシロイチゴの花。



8月は上ノ原の植物が最もにぎやかになる季節でしょう。ハンゴンソウ、ノハラアザミ、ツリガネニンジンなど、色鮮やかな花が草原を埋め尽くします。写真は葉の形がのこぎりのような、ノコギリソウ。上ノ原の草原にも数は多くないので、見つけられたらラッキーかもしれません。



9月、上ノ原の季節の進みは早く、もう紅葉が始まります。写真のオオカメノキ(ムシカリ)はミズナラ林など冷温帯林の代表的な低木。秋にはまだらに赤茶色に紅葉し、木漏れ日が当たるととても美しい。

■野守のつづやき③～邯鄲の正夢？

清水 英毅

●今宵も「かん太」の美声に耳傾けつ 「かん太」と命名したのは上ノ原産のカンタン(邯鄲)。10月11日の学習会で「草原で鳴く虫の王はスズムシ、女王はカンタン。鳴くのはどちらもみななのですが！」と講師役の多葉田さんに教えてもらった。以来、我家の住人となって夜ごと妙なる鳴声を楽しませてくれている。今宵も彼氏の美声をBGM代わりに、秋以降の出来事など振り返りつつ来る年の夢を紡いでみたい。

●「野守」のガイド、初体験記 10月17日～18日、『四樹会』ご一行と藤原に遊んだ。伊東さん、寺山さんに林部さん。元・サンワみどり基金時代、共に支え合った仕事仲間だ。最初に訪ねたのは、湯の小屋国有林内に位置するサンワみどり基金「水源の森」。2000年9月、「森林塾青水」発祥の地だ。散策の後、門柱『水源の森』の前で記念撮影。来し方14年を振り返り、感慨一入。



その足で照葉峡の紅葉と名瀑の眺めを堪能、温泉ロッジYへ。ご主人と奥さま二人三脚の手作り料理の数々、美酒酌み交わし罍にどっぷり、旧交大いに温まる一夜。



翌朝は明川集落散策後、上ノ原「入会の森」へ。おりしも、金井産業の皆さまが薪ストーブ用ミズナラ伐採木の搬出に来ておられた。金井社長もお誘いして、防火帯兼管理道から木馬道を縫って奥の細道へのご案内。奥座敷の休石で一服。十郎太の沢水と紅葉のミズナラ林の爽やかな空気を満喫。まさに、至福のひとつ時。

●世界で唯一「茅刈り検定」の結果 10月26日、野守協会認定「茅刈り検定」が上ノ原で開催された。内野さん、高橋さん、その結果をお聞き及びでしたか？何と、元「ミス上ノ原」仲間の三好さん(写真右)が見事、「茅刈り士補」の資格ゲット。「士補」と侮るなかれ、世界中でたった7人の難関です！



時を同じくして嬉しいことがあった。地元の皆さま方にとって、かねて念願の諏訪神社の屋根替えが完了。ボランティア仲間でも刈りとり、藤原区に寄贈申上げていた茅が活かされたこと。新たに葺き替えられた



茅葺屋根、秋天に映えまこと清々しき限りだった。

●山の口終い;十二神様と草木塔に感謝 11月15日～16日、恒例の茅ポッチの搬出と「山の口終い」。初日は小雪舞いくる悪条件、まるでサハリン捕虜収容所まがいの過酷な引き出し作業。されど、老若ならぬ老荘男女15名ばかりが嬉々として奮励、2日間で3,700束余を搬出。これが、やがて町田工業さんの手により関東一円の重要文化財の茅葺屋根になる。まこと、尊きことなり。



16日午前の作業終了後、参加者全員うち揃って「山の口終い」。過ぐる一年の無事と自然の恵みに感謝の思いを込め、大山祇神や加屋野姫神はじめ十二神様ならびに草木塔に向かい頭を垂れた。



●今年の収穫と来年の課題 塾創設期からの最古参幹事として、良かったと思うことを言うなら ①次なる10年を若い新執行部にバトンタッチできたこと ②これまでに上ノ原に入り会った人々の数が延1万人を超えたであろうこと。いずれも、塾の活動史上エポックメイキングかつ目出度いことなれど課題も残した。その最たるものは、地元における活動の担い手の若返り。野焼き、茅刈り始め、これまでご指導賜ってきた古老衆にいつまでも頼る訳にはいかない。老婆心ながら、地元在住の幹事・会員諸兄の奮起を期待すること切。

●追悼;宇沢弘文先生と流域コモンズ 健さん、文太さん・・・今年も多く惜別があった。9月8日、畏敬する宇沢弘文先生も逝かれた。自然環境や道路・橋など社会インフラと学校・病院といった制度資本からなる「社会的共通資本」。その重要性を提唱された著書に深く感応し、当塾として「流域コモンズ」形成を初めて標榜したのは平成10年のこと。もとより、道半ばかつ前途はるか。しかし、訓を胸に刻み、地元・上流域の志援ネツを固め粘り強く展開していくことがご恩に報いる唯一の道。

しろがねの刻の満ちゆく芒原

黒川路子

平成26年師走(青)

～編集後記～

10月の茅刈りには、今回も会員、会友はじめ大勢の方の参加がありました。今年は茅の丈も小さいように感じ、不安がありましたが、刈りやすい場所を求めて草原に分け入ると、身の丈を超える茅原が広がっていました。「茅を見て草原を見ず」であったことを反省し、少しホッとしました。本号には多くの方より報告や感想をお寄せいただき、16ページとなりました。上ノ原を中心に様々な取り組みが進みつつあることの反映でもあります。その思いが流域全体へと少しずつ広がってゆくことを願って、『茅風通信44号』をお届けします。(編集子)